高井　岩生（言語学）

スコープ解釈の統語論と意味論

本論文は、スコープ解釈の統語論と意味論を、理論言語学の観点から緻密に組み立てることを目指したものである。その結果、これまでの理論言語学研究において、長らく敬遠されてきた根本的な問題にも正面から取り組むことになり、文の構造についての基本的かつ斬新な提案が数多く含まれた意欲作となった。

本論文では、まず、日本語の [NP が　NP を　V] という語順の文のスコープ解釈について論じられている。これまで、このような基本的な構文についてさえ、スコープ解釈の可能性について諸説があったが、本論文では、文法的にその解釈可能性が決定できる LF スコープ解釈と、それ以外のスコープ解釈を峻別するべきであるということを論じ、その上で、日本語において、LF スコープ解釈は一義的に決まるという一般化が観察的妥当性を満たすということが示された。

さらに、LF スコープ解釈の意味論が具体的に展開された。従来、スコープ解釈は、割り当て関数に基づく分析案が主流であったが、それだけでは原理的に説明が不可能な現象（E タイプ代名詞と「先行詞」との間に成り立つ照応現象）があることを指摘し、まったく新しい観点からの分析案が提案された。

次に本論文が取り組んだのは、「日本語において [NP が　NP を　V] というのが基底の語順である」という前提がいかにすれば導出できるかということであった。この命題は、日本語の文構造を議論する際に不可欠な仮定であるにもかかわらず、ほとんどの研究において単に措定されてきたものである。本論文では、現在の枠組みにおいて、この命題を導出するために、日本語の格助詞の機能、そして、名詞句と述語の関係というものを根本から見直し、その結果、統語構造生成のメカニズムとして、必然的にガ格名詞句がヲ格名詞句よりも上位に基底生成される仕組みを作り上げた。このメカニズムは、いわゆる派生述語を含む文にも適用可能な汎用的なものである。

さらに、このメカニズムの策定によって、項と付加詞という概念の区別の二面性が明らかにされることになった。付加詞には、項とは区別されるべき側面がありながら、項と同様の扱いを受けることもあるという二面性が存在することが従来から指摘されてきたが、そのような二面性が見事にとらえられている。このような付加詞の位置づけは、まったく新しいものであり、今後の研究に対して大きな影響を持つものであることは確実である。

以上のように、本論文は、スコープ解釈の問題にとどまらず、ひろく、文というものの構築方法について、様々な点で新しい提案を含む理論を構築しており、きわめて斬新で広範囲の影響をもちうる研究である。よって、本調査委員会は、本論文の提出者が、博士（文学）の学位を授与されるに十分であることを認める。